

# 松に囲まれて春を待つ ～〈黒書院〉三の間～

二条城二の丸御殿障壁画は、寛永3年（1626）、後水尾天皇（1596-1680）の行幸を前に行われた二条城の大改修の際、狩野派の絵師たちによって描かれました。今回は、二の丸御殿の中の〈黒書院〉三の間に描かれた障壁画を一挙公開します。

## 〈黒書院〉三の間の役割と「松」

〈黒書院〉は、江戸時代の前半には、將軍との公的な対面所〈大広間〉に対し、「小広間」と呼ばれていました。〈大広間〉では、主に、大名や異国の使者等との対面が行われましたが、「小広間」（黒書院）では、高位の公家や、徳川家に近い大名が対面しました。いずれも、一の間に將軍が座り、二の間に対面相手が座って対面し、三の間は、対面を控えた相手が待機する場所であったと考えられています。

〈大広間〉一の間から四の間の障壁画は、松に禽鳥を添えて描かれています。〈黒書院〉一の間の床間や、三の間の障壁画も松を中心に構成されています。常緑樹である松は、不老長寿や恒久的な繁栄を象徴することから、〈大広間〉と〈黒書院〉においては、徳川家の権力の永続性を願って描かれたと考えられます。

## 冬から春へ

ただし、〈黒書院〉三の間の松には、〈大広間〉とは異なる点があります。それは、〈大広間〉は壁面全体に巨大な松を描くのに対し、〈黒書院〉三の間は、長押の上下で画面が分かれ、比較的小ぶりの松が描かれる点です。そのため、〈大広間〉の松は威厳や壮大さを、〈黒書院〉三の間の松は優美で軽やかな雰囲気を持たえます。

〈黒書院〉三の間長押下の《松図》には、松だけでなく、晩夏から冬にかけての季節を示すモチーフが描かれるのも特徴です。例えば、東側の襖（展示室右側に展示）には、晩夏から秋に咲く水葵が、南側の戸襖（展示室左側に展示）などには、秋に咲く竜胆が描かれ、北側の襖4面（展示室右側に展示）には、刈り入れの済んだ田んぼと、そこに舞い飛ぶ一羽の白鷺、その隣の壁貼付には、うっすらと雪が被る松と、その根元に佇む二羽の白鷺が描かれます。

この〈黒書院〉三の間は、上述の通り、將軍の対面相手が待機する部屋であり、対面の時が来ると、相手は、桜咲き小鳥たちが戯れる、春の情景が描かれる二の間へ入り、一の間に座す將軍と対面します。晩夏から冬の情景が描かれた三の間から、この対面所へ入るとき、障壁画が演出する春の晴れやかさ、華やかさは、視覚的に強く印象付けられたことでしょう。対面の場を晴れやかな「春」として印象付ける、そのために、待機場所である三の間の松には、晩夏から冬の情景が加えられたと考えられるのです。

## 「將軍」の邸宅に描かれた天橋立

〈黒書院〉三の間の長押上には、松の生える浜辺、いわゆる《浜松図》が描かれます。ただし、この浜辺は、北側の壁面では、東から西へ、南側の壁面では、西から東へ向かって、細長い陸地が突出して描かれており、それらは、名所、天橋立の地形を思わせます。近年の研究によって、天橋立は、室町幕府の足利

家將軍、六代義教（1394-41）の新造会所と、八代義政（1436-90）の泉西殿の障壁画に描かれたことが、分かっています。新造会所と泉西殿は、いずれも内裏の北西に位置する將軍の邸宅、室町殿の敷地内に建てられた建物です。この室町殿は、三代將軍、義満（1358-1408）が創設し、「花の御所」とも呼ばれました。義教とその息子、義政の屋敷に天橋立が描かれた背景として、義満が度々訪れた天橋立を屋敷に描かせたことに端を発し、以降の將軍たちが、これを伝統として受け継いだ可能性が指摘されています。天橋立は、古くから知られる名所であり、和歌や能などの文学作品や、絵画の主題となってきたモチーフでもあります。

〈黒書院〉三の間の《浜松図》が天橋立であるならば、徳川幕府は、天橋立にまつわる文学や絵画の伝統のみならず、足利將軍家の邸宅の画題であることを踏まえて、障壁画を描かせたと考えられます。〈黒書院〉の対面所に、桜とともに描かれる様々な種類の鳥たちもまた、六代義教の新造会所に存在した「小鳥の床間」を想起させます。徳川幕府は、こうした画題を選ぶことで、自らを室町幕府の継承者として、二の丸御殿を「將軍」の屋敷として示そうとしたのかもしれませんが、それは、〈大広間〉に入る大名ではなく、〈黒書院〉に入る高位の公家たち——室町幕府の將軍邸についての知識を持つ相手——に対してこそ、有効に伝わるメッセージだと考えたのではないのでしょうか。

こうした画題の選択が可能となったのは、二条城の障壁画制作を行った狩野派は、その祖である狩野正信（1434?-1530?）の時代から足利將軍家に仕え、彼らの注文に応じてきたからです。当時の絵師たちは、先人の作品を手書きで写し、あるいは下絵を保存して集積し、それらを制作の参考としていました。二の丸御殿の障壁画制作の時点では、足利將軍家の屋敷は失われていましたが、室町時代から幕府に仕えていた狩野派だからこそ、自分たちのアーカイブを使って、「將軍」屋敷の伝統を踏まえた障壁画を描くことができたと考えられるのです。

## 筆者、狩野尚信について

〈黒書院〉三の間の障壁画の筆者は、狩野尚信（1607-50）とされます。尚信の兄、探幽（1602-74）は、上述した〈大広間〉対面所の障壁画を描きました。当時、二十歳であった尚信は、ベテラン絵師のサポートを受けていたとされ、〈黒書院〉三の間の《松図》に見られる、カーテンの様に画面を覆う金雲や、円弧を描くように屈曲する松の形には、一世代上の狩野派に倣う姿勢が見られます。しかし、画面全体に漂う優しい雰囲気や、鳥や草花に見る愛らしく繊細な描写には、その個性の萌芽が伺えます。様々な「伝統」を踏まえながら臨んだ若き絵師の挑戦を、ぜひ、ご覧ください。